

審査論文の要旨

本論文は、飛鳥時代の瓦生産の変遷を明らかにし、それを技術者編成を軸に生産体制の変化として読み解くことを目的とし、藤原宮の造瓦にいたる道程をあとづけようとするものである。そのために、緻密な瓦研究を基礎とし、技術者の移動を復元し、年代の先後関係を丁寧に考察するといった手続きをおこなうことから、実証性の高い根拠にもとづく議論を展開している。律令体制に立脚した生産体制の形成過程を明らかにするという目標に向けた基礎研究として、今後の研究にとって重要な達成になる論考であると言える。

飛鳥時代の瓦に対する考古学研究は、寺院研究の進展とともに多くの蓄積がある。とりわけ、飛鳥や近江など政治的中心であった地域の瓦研究は、歴史的な評価とも関係してさまざまな取り組みがある。また、はじめて宮殿等に瓦葺きの建物が採用された藤原宮の瓦生産についても、宮都研究の一分野として研究が厚い。こうした状況のもと、最初の瓦葺き寺院である飛鳥寺の造瓦から藤原宮の造瓦まで、7世紀一杯を対象とする本研究は、これまでにない取り組みであり、そこで採用される瓦の技法に対する精密な検討は、研究の先端に位置していると高く評価ができる。歴史的な解釈について、他分野とのすりあわせなど課題も多く残されるが、律令国家体制の形成についての議論に資する結論を得ている。

本論文は、全3部で構成され、序章、終章を含めて全12章からなる。序章において目的と課題を提示し、第1部では黎明期の瓦生産、第2部では近江朝の瓦生産を扱い、第3部では藤原宮・京の瓦生産について分析をおこない、終章をまとめとしている。

第1部では、6世紀末の崇峻朝から7世紀半ば過ぎの天智称制期までを対象とし、天皇家にかかわる寺院の瓦生産に着目して分析をおこなっている。第1章ではミヤケが重要な役割を果たしたと考察し、大化前代の体制にもとづいて瓦生産、寺院造営をおこなっていたと説く。第2章では川原寺の造営にあたって、広瀬荘という荘園で瓦生産がおこなわれていたことを明らかにし、ミヤケを受け継ぐ寺領での生産がおこなわれたと考察し、ミヤケから寺領への転換を新しい動きとして評価した。

第2部では、近江朝から天武朝前半期までを対象とし、大津京に関わる寺院を中心に分析をおこなっている。第3章では、南滋賀廃寺を取り上げ、瓦に対する検討、および崇福寺の寺域に関する文献との対比から、両寺が近江朝に一体で営まれた寺院であると論証した。第4章では南滋賀廃寺の創建時の瓦窯である榎木原瓦窯を取り上げ、悉皆的な瓦の分析から近江朝の瓦について明確にし、その影響の及び方についても検討を加えている。第5章では大津廃寺と穴太廃寺をとりあげ、榎木原瓦窯の製品との対比から両寺の本格的な造営が天武朝に降ることを明らかにした。同様に第6章で園城寺を取り上げ、7世紀前半の創建後にブランクがあり、天武朝に造営されることを明らかにしている。こうした検討から大津京の寺院とされた寺院の多くが天武朝に降ることが明確となった。

第3部では、藤原宮の時代、天武朝後半期から持統朝を対象とし、藤原宮に関わる造瓦を中心に、その生産体制を考察している。第7章では畿外の瓦窯の探るため大津市の石山国分瓦窯を取り上げ、在地の寺院である国昌寺に先に瓦を供給した後に藤原宮に瓦を送つ

ていることを明らかにし、貢納的な性格をもつと結論づけた。第 8 章では藤原宮と本薬師寺の双方で同じ文様の瓦が使われている現象に注目し、従来の両者が一体的に造営されたという従来の学説を否定し、それらの瓦が天武朝の藤原宮、天武天皇の死後に薬師寺造営で別々に用いられていて、直接的な交流はうかがえないと結論づけた。第 9 章では本薬師寺から藤原宮造瓦の工房、西田中・内山瓦窯への技術者の移動について論証している。これまでから推測されていた移動ではあるが、軒瓦だけでなく、丸瓦・平瓦を含めた総体で論証がされており、おおむね 690 年頃に技術移動があったことを明らかにした。第 10 章では藤原宮の別の瓦を取り上げ、従来から久米寺との関係が指摘されてきた瓦を分析した結果、久米寺の技術者が藤原宮の瓦窯に移動していることを明らかにした。9 章の成果とともに、持統朝になって民間の技術者の動員が可能になったと評価する。終章では以上の検討をまとめ、天皇家に関わる瓦生産の変遷について二つの画期を措定する。一つ目は天智朝の画期であり、ミヤケに基づく生産からの脱却を説く。二つ目は持統朝の画期であり、技術者の移動による大規模生産の達成を挙げる。この画期以後、律令体制下の瓦生産に通底する枠組みができたと評価している。